

# 新入生講座におけるアニメ 『みんながHAPPYになる方法』 による紛争解決教育の効果

－ コンフリクト対処スタイルの変化 －

○杉田明宏

大東文化大学

いとうたけひこ

和光大学

井上孝代

明治学院大学

キーワード：紛争、転換、トランセンド、アニメーション、  
紛争解決教育

# 問題と目的

- ◎ 著者の一人（杉田）は、2012年度の大学新生の入学ガイダンスにおける入門講座として行ったワークショップ形式の平和教育として、大学新生講座『アニメで学ぶ対立の解決』と題するワークショップを実施した。
- ◎ 本研究では、大学新生講座の内容について説明し、事前事後のテストの比較により教育効果を検証し、最後に総合的な考察を行う。具体的には、平和教育アニメーション「**みんながHappyになる方法**」の視聴によるコンフリクト対処スタイルの変容を測定した。

# 方法(1)

- ◎ **教育の場と対象：** 2012年4月14日、国立女性教育会館の研修室を会場に実施されたD大学文学部教育学科の新入生オリエンテーション合宿体験講座において、受講生71人（男27人、女44人）に対してワークショップ形式の入門講座を実施。
- ◎ **実施手順：** 50分の体験講座2クラスにおいて、事前テスト（アンケートA）→DVD前半視聴→ミニ討論→後半視聴→ミニ討論→事後テスト（アンケートB）という手順で実施した。

★表1 参照

# 方法(1)-2

表1 新入生オリエンテーション合宿体験講座『アニメで学ぶ対立の解決』の実施手順

事前テスト	5分	① インストラクション ② アンケートA 各自記入
DVD視聴: 「Chapter3 Happy になる5つの方法」	1分 46秒  5分  4分 49秒	① 前半視聴 ・5つの方法の前迄で停止  ② 「自分だったら教師として学級委員としてどう解決に持って行くか」を考えシートに記入  ③ 後半視聴 ・5つの方法～
振り返り	5分  10分	① 視聴感想を各自シートに記入  ② 4～5人に感想を求め短くコメント
事後テスト	8分	アンケートB 各自記入

# 方法(2)

- ◎ 調査内容：葛藤対処スタイル尺度（村山・藤本・大坊,2005）：2回の予備調査を経て尺度の原案を作成し、大学生233名を対象とした調査により検出された、自己志向対処（7項目）、他者志向対処（7項目）の2因子14項目から構成される質問紙。
- ◎ 教示文「あなたは、4，5人のグループで生じた、メンバー同士での意見の不一致や仲たがいに対して、以下の行動をどの程度取りますか。どれかに○をつけてください。」に対して、「かなり使う（5点）」、「よく使う（4点）」、「どちらとも言えない（3点）」、「あまり使わない（2点）」、「全く使わない（1点）」の5件法で尋ねた。

# 方法(2)-2

## アンケートA(事前),B(事後)の項目例

- ◎ あなたは、**ふだん**、家庭や学校などで起きたもめごとや対立に対して、以下の行動をどの程度**取っている**と思いますか。(A)
- ◎ Bは「あなたは、**今後**、家庭や学校などで起きたもめごとや対立に対して、以下の行動をどの程度**取るだろう**と思いますか」という予想

1.自分から行動したり発言する

\*自己志向

2.相手の意見を受け入れる

\*他者志向

3.相手が理解するまでとことん説明する

\*自己志向

4.互いによく認め合うようにする

\*他者志向

# 結果(1)

- ◎ **自己志向**と**他者志向**の得点をそれぞれの中央値で上位群と下位群に分けた。加藤(2003)の命名を参考にして、自己志向・他者志向両方の上位群を「**統合**」群、自己志向上位群でかつ他者志向下位群を「**強制**」群、自己志向下位群でかつ他者志向上位群を「**譲歩**」群、両方とも下位群を「**回避**」群と名付け、4つの葛藤方略スタイルを比較した。事前テスト得点平均の中央値に基づき、自己志向高低群・他者志向高低群で全体を便宜的に4群に分けた。

★表2参照

# 結果(2)

表2 葛藤対処スタイルの4群

他者志向



# 結果(3)

- ◎ 事前と事後の各タイプの人数の変化から効果の有無を検討すると、 $\chi^2(3) = 26.0, p < .001$ であり、統計的に有意な効果があったと確認できる。残差分析より「統合」の人数が有意に増加しており、「回避」の人数が有意に減少していた。
- ◎ 効果の大きさの指標であるCramerのV = .414であり、「大きな」効果量が得られたと解釈できる（大久保・岡田, 2012）。
- ◎ 効果の一般性（南風原, 2010）をみるために、「統合」に3点、「強制」「譲歩」に2点、「回避」に1点を与えて点数の増減をみると、プラスの変化34名、変化なし32人、マイナスの変化5人であり、34人を71人で割ると全体の48%にプラスの効果があったといえる。

# 結果(4)

表3 葛藤対処スタイルの事前・事後での変化

葛藤対処スタイル	事前		事後	
	人数	パーセント	人数	パーセント
統合（高高群）	16	22.5	38	53.5
強制（高低群）	19	26.8	14	19.7
譲歩（低高群）	20	28.2	15	21.1
回避（低低群）	16	22.5	4	5.6
合計	71	100.0	71	100.0

# 結果(5)

- ◎ 事後テストにおける自由記述の感想文の内容を分析したところ...
- ◎ ポジティブ評価44人
- ◎ 中立的評価16人
- ◎ ネガティブ評価1人
- ◎ 無記入10人

記入者の72%が肯定的評価を行っていた

# 考察(1)

## (1) 結果の要約

葛藤対処方略のタイプの変化、得点の変化、事後の感想文の内容の3つの指標から、今回のアニメによる入門的な紛争解決教育のワークショップに教育効果が認められた。

感想文の記述内容からは、おもしろいという感想、答えは一つだけではないことへの気づき、グループによって新たな発想や違った意見が出ることの効果、柔軟な発想の重要性など、気づきと知識と将来への意欲が感じられた。このように、短時間の教育的介入でも効果が大きいことが実証されたといえよう。

# 考察(2)

## (2) アニメーションによる紛争解決教育の意義

- ◎ 本作品は、子どもたちが学校の授業などの場面でコンフリクトを平和的に転換するための発想やスキルを獲得することを想定して作成されている。アニメーションはそうした年少の学習のみならず、今回の対象であった大学新入生たちも楽しんで視聴しており、アニメーション文化に馴染んでいる大学生年齢にとっても有効であるという印象を受けた。
- ◎ また、本作品は小学校の授業でも活用しやすいように一話10分以内にストーリーとポイントがまとめられており、紛争解決教育に触れる機会が少ない日本の大学生や大人にとっても理解しやすく活用しやすいものになっていると言えよう。

# 考察(3)

## (3) 紛争解決教育の意義

- ◎ 幼児期から青年期の発達過程で、友人同士のもめごと・対立、からかい・意地悪・いじめといったコンフリクトを経験する多くの子どもたちにとって、そうした事態に対処し転換していくための知識、思考法、スキルを獲得するニーズは大きいと言えよう。そのための紛争解決教育は、近年日本においても教育関係者を中心に注目され、ピア・メディエーションなどの実践と研究が進められてきている（いとう・水野・井上, 2010）。
- ◎ しかし、年少の学習者が直接活用できる教材と実践例はまだ希少であるため、有効な教材の開発と活用研究が今後の発展の鍵をにぎっているといえるだろう。

# 今後の課題(1)

- ◎ a) 今回の実践は心理学実験としてではなく、大学新生に対する学問体験を目的としたワークショップ型の教育場面で実施されたため、文章化、話し合い、ミニ講義が挿入されている。したがって、**アニメーション作品以外の要素の効果**が評価されていることは否定できない。
- ◎ もっとも、本作品は、参加型学習、ロール・プレイ、分かちあい、アクティブ・リスニング、協同学習、問題解決といった学習活動に組み込まれた使用を想定としているため、そうしたひとままとまりの**実践を通してどのような効果があるかに着目すること**にこそ意味があるものと考えられる。

## 今後の課題(2)

b) また、今回の実施対象は教育学・教員養成系であり小学校教員志望者が多数を占めるという特徴をもつ。

他の学部・分野の大学生においても同様の結果となるかどうかは、実験を追加して検証する必要がある。

# 今後の課題(3)

c) 上記のような限界があるにもかかわらず、本研究では短時間であっても視聴覚教材を取り入れた紛争解決教育が効果的である結果を得た。

『みんながHappyになる方法—関係をよくする3つの理論』のDVDでは、今回もちいたトランセンズのストーリーの他にも、「私メッセージ」のストーリー（「ジョニー&パーシー」）と「和解」のストーリー（「鬼退治したくない桃太郎」）がある。

今後の活用とその効果の検証が期待される。

# 主な文献

- ◎ 南風原朝和 (2010). 「個を重視する量的研究」 『カウンセリング研究』 43巻, 303-307頁。
- ◎ 平和教育アニメーションプロジェクト (2012). 『みんながHappyになる方法—関係をよくする3つの理論』 平和文化。
- ◎ いとうたけひこ・水野修次郎・井上孝代 (2010). 「紛争解決法としてのピア・メディエーション: 関西M高校での取り組み」 『トランSEND研究』 8巻2号 70-75頁。
- ◎ 大久保街亜・岡田謙介 (2012). 『伝えるための心理統計: 効果量・信頼区間。検定力』 草書房 94-96頁。
- ◎ 杉田明宏・いとうたけひこ・井上孝代(2012). 「アニメ『みんながHappyになる方法』を用いた紛争解決教育: 大学新入生講座「アニメで学ぶ対立の解決」におけるコンフリクト対処スタイルの変化」 『トランSEND研究』 10巻1号 24-33頁。